

フランス国立図書館
藏ペリオオ菴集 3738

敦煌本「李嶠雜詠注」殘卷についての一考察

朽尾 武

序

初唐の李嶠(二四四七—七〇八)の題詠詩である「李嶠百廿詠注」(雜詠の敦煌殘卷についての一考察である。一九九五年度一年の研修休暇を興えられ、パリのフランス国立図書館藏のペリオオ³⁷³⁸「李嶠雜詠注」殘卷及びロンドンの大英国立図書館藏の「スタイン³⁷³⁹」³⁷³⁹「李嶠雜詠注」殘卷を調査することができた。調査に當り、東洋文庫の松本明氏に紹介の勞をわすらわれ、パリにおいては国立図書館の小林恵子氏の世話に當り、Monique Cohen 女史の許可をいただき、ゆづり閲覧することができた。またロンドンにおいては図書館の「Fring Brown 女史」に紹介いただき、納得できるまで調査させていただき、いずれも要職で多忙の中を貴重な時間をさいていただき、感謝に耐えない。その勞に報いるべく、研究成果を公表することにした。今回はペリオオに限定し、次回にスタインを扱うことにする。

ペリオオ、スタイン將來の敦煌本はいずれも同一人の手になる條卷だと言われている。いずれの卷もマニコアルムや影印本があるが寫真では讀み取れない所がある。特に朱の書き入れや紙の状態がわかりにくい。朱は寫真に寫りにくいところがあり、また紙は一枚の紙が切り継ぎ補修されているかどうかの確認が必要である。幸いその危惧は杞憂に終わったが、別の疑問がはしる。また兩卷は字體が同一人の手になることが微妙なところと違いを感ずるところがある。そのために兩者を並べて比較する必要があり、ただし同時代に書かれたという點では納得できる。

この残巻については王重民がやく紹介注目している。神田喜一郎は「敦煌本 李鴻百詠 について」と題して論及している。金岡照光編 敦煌出土文學文獻分類目錄附解説（スチン本、パリオ本）（東洋文庫）萬曼 唐集叙録（中華書局）が書誌に詳しい。池田利夫 日中比較文學の基礎的研究（翻譯説話）（玄間書院）はその内容に深く言及、劃期的研究と言えよう。また、崎誠「李鴻百詠 雜考 續叙」に従来の研究を管見ながら張庭芳法、張方法等について日本に残存する遺文を詳細に調査研究をし、敦煌本法にも論及した出色の論文である。

一、張庭芳法と張方法

張庭芳法と稱せられる 李鴻百廿詠注は室町期寫と稱せられる慶應義塾大學圖書館藏本（以下慶大法本と略稱）と神田喜一郎藏甲乙本及び天理大學圖書館藏本（天理注本と略稱）等がある。陽明文庫藏本に殘巻の上特異な注本である。この度は慶大法本を底本に、適宜天理注本を参照し、パリオの敦煌本について考證する。

張庭芳法と稱せられるのは巻初に「故中書令鄭國公李鴻雜詠百廿首（中略）于時（天唐書卷）唐天寶六年載龍集強圍之所述也」とあるといよる。天寶六年載は玄宗皇帝の治世の年號で七四七年に當る。徐堅等の編集した唐代類書初學記が開元十二年（七三五）に完成されておる、この類書と張庭芳法との深い關が豫想される。この張庭芳法序は無注本にも見られるところ、法を省略した本文であることが知られる。雜詠であるから張庭芳法は李鴻集全部の注である。

張庭芳法はどのような注法であったか、それは敦煌注本のような簡略な備忘的なものであった。楊守敬舊藏の古法張法がさうであるように、現代の我々にはやや物足りないが當時の讀者にはそれと十分であった。唐の天寶六年張庭芳が第一次に注をまとめたものであろう。これに注が增補されより充實したものに近ずけたことは蒙求、その他の注本によつて知ることが出来る。

一方張方法とはいかがなるものか、神田氏や池田氏が指摘されるように晁公武の郡齋讀書志（四上）「今所錄一百二十詠而已」或題曰單題詩有張方法（南宋紹興二十一年（一一五二）元日昭德晁公武序）に張方法が見える。朱觀五の荷覽寮雜記（卷上）に「李鴻云、大庾、大寒、少、南枝、獨、早、芳、張方法云、大庾、嶺、上、梅、南枝、落、北枝、開、南、宋、慶、元」

三年(二九七)四月九日洪邁序)とある。元の宇文房の唐才子傳、李嬌(李嬌)今集五十卷雜詠詩十二卷單題詩一百二十首張方爲注傳於世と見え、池田氏の指摘するまうに張處芳法と張方法が存在し、上の雜記の張方注の本文は明吳瑄の唐詩紀梅、唐詩紀梅、一、太原欽寒光、南枝獨早芳、(全唐詩)この本文を受くと同系と考えられる。一方慶大法本は「院樹、斂寒光、梅、花、獨、早、芳、削、改、言、斂、寒、早、芳、也、」とありて別系統の本文である。日本傳來の張處芳法は注の混在も認められるが、古態を止めていると考えられる。張方法注は郡齋讀書志の書かれた紹興二十一年(二五三)以前の北宋以降に新しい本文に独自の注が施されたと考えられる。

慶大法本はそれでは何時頃増補されたか、これを解くべき工夫は引用書にある。すでに注目されている諸點について検討する必要がある。

二、格物論と事林廣記

各詩の總論ともいへば題注に格物論と事林廣記が引かれる。格物論は池田氏の調査では慶大法本では十五例の引用が見える。南宋の謝維新撰の類書古今合璧事類備要があり、別集二十五卷は南宋の虞載の撰になる。前集の前に謝維新の序があり、南宋の寶祐丁巳(五年)一五七二にこの書が成つたことを知る。この別集に格物總論が見られ、格物論の本文とはほぼ一致する。標點本初學記に附す卷三十嚴篋校宋本異文があり、以管第十四に格物論二則の引用が見られる。今ここに兩者を比較してみよう。

○宋本異文初學記三十一螢「格物論」曰、螢是腐草根及爛竹根所化。初猶未如蠶、腹下已有光、數日變而能飛。又曰、螢生陰濕地。在大暑前後、得大火之氣而化。此明照也。

○洽塵事類九十四螢「格物總論」螢此是腐草及爛竹根所化。初猶未如蠶、腹下已有光、數日變而能飛。然生階地、池澤、常在太暑前後、飛出是得大火之氣而化。故如此明照也。(一名夜光、以下略之)。

李嬌百廿詠には螢題の詩がないので比較はできないが、右の引用例から判断して一部異同は見られるが、格物論と

格物總論 は同一物と考えられる。

合璧事類の花門・果門・衆木門・百草門・穀門・立靈門・飛禽門・走獸

門・畜産門の百廿詠に該当する項を檢するに、百廿詠が格物論を冠する引用文にも格物總論や格物

叢話等からの引用が見られる。次に兩書の對照表を示す。古今合璧事類は明嘉靖丙辰(三五年一五五三)影印本新

興書局

芳草十首 蘭 菊 竹 藤 萱 萍 菱 瓜 茅 荷	古今合璧事類 蘭花 菊花 竹 藤 萱草花 萍 菱實 瓜實 茅 荷花 蓮實	嘉樹十首 松	古今合璧事類 松 槐花 楊柳花 桐花 桃李花 梨 梅子花	靈禽十首 鳳(頭注)	古今合璧事類 鳳 鶴 烏 鵲 雁 鸞 雉 燕 雀	祥獸十首 龍	古今合璧事類 龍 麒麟 象 馬 牛 豹 熊 鹿 羊 兔
1538 1544 1570	1550 1550 1604 1616 1579 1613 1571 1566 1615		1496 1537 1572	1585	1631 1630 1677 1681 1660 1670 1683 1473 1684 1686	1644 1637 1696 1718 1723 1498 1701 1703 1727 1707	

●印格物總論
□印格物叢話
蘭○と印した
ものは格物論
が使われたと考
えられる。
菱と印した
ものは格物論
を明記された
もの。
洋數字は
合璧事類の頁

格物論と格物總論(叢話)が同一と考えばあい、題法に使われた一六(十五)ニ一(三)例は古今合璧事類備

要の成立した實祐五年(一二五七)以降に題法として用いられたと考えられる。當然唐の張庭芳が注を作った天寶

六年(七四七)にはないものである。今のところ、合璧事類以前に用例が見られざることから、格物論は南宋頃張庭芳

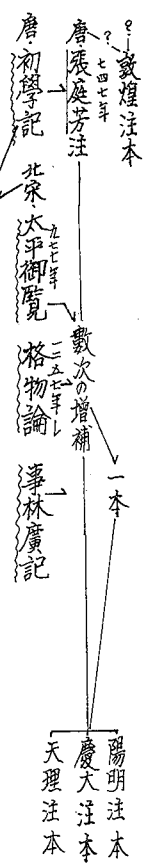
の法に加えられたと考えられる。これは假説としてであるが、張庭芳法系統の本文が傳説藏天皇本以來傳えられた。北宋

の頃は張庭芳注は中國では失われ、日本でのみ傳えられたと考えられる。北宋以降張庭芳注本に代つて全唐詩本文

の原型とする本文が行われ、これに注が加えられた。張方法がこれではなからうか。張方法の本文と注が張庭芳法と異なる本

文を持つてゐることは梅見察雜記の梅の詩であきらかにすたことは神田氏の論考で知ることが出来る。次に傳來の圖式を

亦せ。これにあくまで假説としてである。慶大注本等に見える一、本は張方法系の本文とも考えられる。



張方法の底本は『文苑英華』に近いと考えられる。ペリオ將來の殘卷中の鳳と鶴の詩をペリオ・慶大注本、文苑英華、唐詩紀と全唐詩の本文を比較してみよう。文苑英華は明版。校異は宋本にない。また張方法を傳えている未習の『猗覽彙雜記』の梅詩と諸本を比較してみよう。

有鳥自丹穴 其名曰鳳皇 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過潁水陽	有鳥自丹穴 其名曰鳳凰 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過洛水傍 鳴岐今已見 阿闍佇來翔	有鳥自丹穴 其名曰鳳凰 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過洛水傍 鳴岐今已見 阿闍佇來翔	有鳥居丹穴 其名曰鳳凰 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過洛水陽 鳴岐今日 <small>作</small> 見 阿闍佇來翔	有鳥居丹穴 其名曰鳳皇 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過洛水陽 鳴岐今日見 阿闍佇來翔	有鳥居丹穴 其名曰鳳皇 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過洛水陽 鳴岐今日見 <small>作</small> 阿闍佇來翔	有鳥居丹穴 其名曰鳳皇 九苞應靈瑞 五色成文章 屢向秦樓側 頻過洛水陽 鳴岐今日見 <small>作</small> 阿闍佇來翔
--	--	--	--	--	---	---

諸本系統圖

ペリオ 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫煙	
慶大注本 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫煙 翱翔一万里 來去幾千 <small>季</small> 年 已憩青田側 來遊紫禁前 莫言空敬言露 猶冀一聞天	
陽明文庫注本 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫煙 翱翔一万里 來去幾千年 已憩青田側 來遊紫禁前 莫言空敬言露 猶冀一聞天	
文苑英華 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫煙 翱翔一萬里 來去幾千年 已憩青田側 時遊丹禁前 莫言空敬言露 猶冀一聞天	
唐詩紀 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫煙 翱翔一萬里 來去幾千年 已憩青田側 時遊丹禁前 莫言空敬言露 猶冀一聞天	
全唐詩 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫煙 翱翔一萬里 來去幾千年 已憩青田側 時遊丹禁前 莫言空敬言露 猶冀一聞天	
慶大注本 梅 院樹斂寒光 梅花獨早芳 雪含朝暝色 風引去來香 舞袖迴春徑 歌塵起畫梁 若能長止渴 何暇泛瓊漿	
陽明文庫注本 梅 院樹斂寒光 梅花獨早芳 雪含朝暝色 風引去來香 舞袖迴春徑 歌塵起畫梁 若能長止渴 何暇泛瓊漿	
猗覺寮雜記引張彥極 大度天寒少 南枝獨早芳	
文苑英華 梅 大度天寒少 南枝獨早芳 雪含朝暝 <small>暝花</small> 色 風引去來 <small>一作香</small> 舞袖迴春徑 歌塵起畫梁 若能遙止渴 何暇泛瓊漿	
唐詩紀 梅 大度斂寒光 南枝獨早芳 雪含朝暝 <small>一作色</small> 風引去來 <small>一作香</small> 粧面回青鏡 歌塵起畫梁 若能遙止渴 何暇泛瓊漿	
全唐詩 梅 大度斂寒光 南枝獨早芳 雪含朝暝 <small>一作色</small> 風引去來香 粧面回青鏡 歌塵起畫梁 若能遙止渴 何暇泛瓊漿	

断定することははばかられるが、北宋頃張庭芳法系の本文を失った中國本土において、文苑英華に見られる李系統の本文が出現し、これに張方が注をつけた。この段階においては太平御覽が注釋に使われた。張庭芳が多く初學記に材を得たようにである。張庭芳法の系統は中國においては早く失われたが、日本においては生き續ける。現在中國において見られる張庭芳系統の本文は日本から逆輸入されたものである。張法は張庭芳法に影響することなく、宋末から元初にかけて消滅し日本に傳わらなかつたと考えられる。ただ本文の内は明代の李端集や李端百廿詠（單題詩）に傳えられ、人生唐詩中の李端詩にたどりつく。

右のよう流れの中、太平御覽 格物論 學林廣記 等が張庭芳法に増補される。題注は張庭芳法にはせく後に日本において増補されたと考へるのが自然であろう。學林廣記は「鳳」詩の考證で論議するよう、和刻本の本文は適合せず、元の陳元龍が新しく編集した新編纂圖增補學林廣記（西園精舍、内閣文庫藏）や明の弘治九年（一四九六）詹氏進德精舍本（内閣文庫藏）の本文と一致する。和刻本は内閣文庫と問題であるが、内容はかなり多くの相異を見える。元の泰定二年（一三二五）の増補の刊語を見るに、同く元刊の内閣文庫本との違いをどう説明することがあるのらうか、ちなみに和刻本所引の汁洲記は明清に編集された汁洲記に一致する。

ここで文苑英華 について述べざるを要がある。北宋の三大類書と言へば、太平御覽 太平廣記 冊府元龜 ともいふこの四書をもつて十全な形に在る類書である。文苑英華 は四部分類では「總集」であるが、編集内容は類書方式となり、太平御覽 の集部の稀薄を補っている。唐の後を受けた北宋においては新しく校訂した本文を失ひ、以後のテキストの原形に在るのである。文苑英華 は北宋の雍熙三年（九八六）に完成し、大中祥符二年（一〇一九）の改訂を経て明の嘉靖四十五年（一五六六）に新しく版を起し、萬曆年間（一五七三—一六二〇）に重刊されている。現行の文苑英華 は明版を底本にして殘存宋本を補配している。明版においては梅詩において明らかでない明版の李端詩によって校異を加えている。たとえば領聯（三・四句）において「集作」上林、單題詩「上春」とは明本の李端集において、去來とあるところを「上林」に作

單題詩(李端百廿詠)において「上春」に作るという意であり、現存宋版では枝異が行われをいさない。だが首聯の第一句の「劍」字は四庫全書本「沈苑英華」では「劍」となっており、不鮮明な「剣」となっている部分を「双」と手を加えたのではなからうか、これは影印本を作る時に行われたかも知れないが、原本を確かすべきであろう。沈苑英華の明版の枝異に用いられた明版は明版の唐詩二十六家 中の李端集に梅詩においては「紫花」「上春」の語が見える。單題詩でない集に「上林」という語が見えるというが、現在未見の明九行活字本、明仿宋刊九行本に用いられているのであろう。唐詩二十六家も集であるので、本文におよも單題、集と單純には言えない、枝異に用いた本文がたまにまよったことであろう。

三、敦煌本 & 李端百廿詠 李端集 殘簡の配列について

この殘卷の作品の配列は羊、兎、鳳、鶴の順である。現在も李端集 李端百廿詠 においては鳳鶴をはじめに羊兎を後にする。百廿詠 におよも「靈禽十首」の首が鳳、これに鶴が続く。この十首の後に「祥獸十首」が配置される。羊、兎は最後尾に位置する。これは敦煌本が「祥獸十首」「靈禽十首」に配列されたことを意味する。

藝文類聚 は鳥部を前に獸部を後に置くところ、初學記^(注2) は獸部を前に鳥部を後に配す。張庭芳注は最も同時代的な類書 初學記に材を得ていると考えられるので、同じ配列であらうとおおくない。ところが白居易の撰と云われる百氏六帖 は鳥、獸の順である。張方法に近い北宋の沈苑英華はもともと宋版と同じ配列を襲っていたら鳥、獸の配置である。ところが沈御覽(宋版)は獸部「羽族」の順である。この順は清代の石印版も同じである。しかし、一般的には鳥と獸の配列であり、清代の淵鑑類函も鳥と獸の配列に従っている。かの南宋の古今合璧事類備要も同配列である。現存の張庭芳注系の本文を持つ傳燈跋入皇本 李端集もまた同順である。そのような中において陽明文庫注本は「祥獸十首」「靈禽十首」の配列であることは注目してよい。しかし本文は張庭芳系である。新しい本文が発見されない今、敦煌本は張庭芳とは別系の孤本とすべきであろう。

もう一つ大きな問題點は敦煌本のこの殘卷は羊詩の頸聯(五六句)の注の一部と尾聯(七八句)を殘し、鳳詩の尾聯を脱落したまま鶴詩に結びつてゐる。鶴詩は首聯の本文と注の一部を殘すのみである。ここで一番大きな問題は鳳詩と鶴詩をこのように不自然に結びつけたことである。結論を言うならばこの殘卷はもとものと書き損じてある。しかし、書き損じても當時のものを書き傳へてゐるから價値は高い。考古學では常識に屬する。後に亦す Leit Chinois 3738 李嶠雜詠殘卷 傳張庭芝方法 の影印本と翻字及び Leit Chinois 3738 李嶠雜詠(百廿詠)殘卷想像復元文 を参照されたい。この復元文に想像を冠したのは殘存部の誤りと思へる部分の最低限の訂正と脱落部はこのようものやという意味であつて原文は備忘程度のもので無視してもらつてよい。私はこの度の調査において紙の状態を調つみたが切り接ぎは全く一枚の紙である。したがつて書き損じと言つてよからう。王重民の 巴黎敦煌殘卷叢錄 を神田喜一郎氏が紹介して「この二つの斷簡がいづれも 李嶠百詠 の詩の本文を二句つらねて大字で書き、その下に小字で雙行に書いてある體裁の完全と同じであること、更に二つの斷簡とも同じの書體をよく似てゐて、どうしても同一手に出たものに相違ない」と認められることとの二つの理由によつて、元來一書であつたものが何時か截斷せられ、現在見るがごとき二つの斷簡とやつて殘つたものであつたと推測してゐる。この推測は大體承認できようが、同筆かどうかについては疑問に感じた。また紙質が違つてと言ふ説もあるが、反古に書かれたやうで、そのあたりも考慮すべきであらう。

これらの議論はもかく、同系統の注本であることは認められる。我が長友東山健吾教授は近著 敦煌三大石室莫高窟 西千仏洞 榆林窟 (講談社選書メチエ一九九六年四月一日刊) の封じ込められた敦煌文書の謎に興味ある説を述べてゐる。氏の論は極めて細緻で内容を持つが、この度にも當面必要をこののみを紹介するに止める。したがつて氏の本を讀まれることを薦める。スタンに經典と文書絹繪佛像等が小洞に封じこめられたのは西夏王國の党項の李元昊が沙州に追つたため、經典類を守るために小洞に封じこめたと考へていたが、これを對して文書を封じこめた原因は一廢棄物處理説を支持してゐる。藤枝晃氏の「文書は經卷の殘卷が主で、また紙を表裏使用したもの、左右貼り合せた廢紙を再利用したものの、練習習帖等々まじり」と「層が多い」という考へ方を援用して「これらの文書を焼却しなかつたのは、その大部分が佛典であつたことと、紙に書かれた文字も惜

し、中國の傳統によるものであつたと述べている。ここに問題としてゐる敦煌本の李鴻雜詠の殘卷は、の卓見によつて見事に説明できる。この殘卷は屑であつたため保存され、今は寶にすつたのである。したがつて最古の寫本として、李鴻百廿詠 研究に貢獻するこゝとにまつたのである。首尾一貫しなほ本文の存在も納得できる。

敦煌本の李鴻雜詠 殘卷を傳張庭芳注としたのは今のところ同系の本文が発見できず、孤本として別系統として立てざるを得ないからである。したがつて敦煌本を考證するに際して張庭芳系の本文を持つ慶大本注 李鴻百廿詠 と底本と對比し、から論述することしたのである。また「釋義」を加えたのも、引證した典故と句意が密接を關係にあることを明かにすること、および注の語義を解明することにより、注としての姿を理解するにためであつた。

考證に當つてはかぎり長い引用も敢てせしなるべく讀み易くすために條訓や返點を加えなが、詩の句意以外は口語譯もしなかつた。これは頁かいたすに増えなほいようにしたからである。

注 王重夙 敦煌古藉叢錄 李鴻雜詠注 一九三八年

注 神田喜一郎 敦煌本 李鴻百詠 について 東方學會創立五十周年記念東方學論集 一九六二

注 金照光編 敦煌出土文學文獻分類目錄 附解說 一ライオンペリオ本 西域出土漢文文獻分類目錄 44頁 李鴻詩集

庭芳注 一九七一

注 萬曼 唐集叙錄 李鴻集 一九八〇 中華書局 李鴻集 についての書誌。

注 池田利夫 日中比較文學の基礎的研究とその興隆 立間書院 一九七四 初版。第七章「百詠和歌と李鴻百詠」

注 山崎誠 李鴻百詠 雜考 續貂「國語圖文」一九八三・七。また湖志昂に「李鴻雜詠註 考」敦煌本殘簡

を中心に「檄」二號があるが未見。同氏の「日本現存「百二十詠註考」和漢比較文學 六號 一九五〇 において

張方注三例の佚文を指摘している。ただ單題詩が眞に張方注かどうかは言い切れなほ、興味ある指摘であり。

法泉公武 群齋讀書志 四上 李嶠集一卷 宋淳祐袁州刊本 故宮博物院圖書館藏 商務印書館影印本

李嶠集一卷

右唐李嶠巨山也 梓潼人 擢進士第 制策甲科 爲監 祭御史 武后時 同鳳閣鸞臺平章事 嶠備才思 與 王勃 楊炯 中 與 崔融 蘇味道 齊名 號諸人 沒爲文章 猶老學者 取法集本 六十卷 未見 今所錄 一百二十 詠而已 或題曰 單題詩 有張方法

法泉 朱翌 猗覺寮雜記 上 知不足齋叢書

「梅用南枝專共知 青瑣紅梅詠云 南枝向暖北枝寒 李嶠云 大庾天寒少 南枝獨早 張方法注云 大庾嶺上 梅南枝落 北枝開 南唐馮延巳詞云 北枝梅蕊犯寒開 則南北枝專其來遠矣」

法元 辛文房 唐才子傳 二 五山版 汲古書院影印 一九七〇 九の成宗大德八年(一三三)四序刊 傳璇璣 唐才子傳 披箋 第冊 中華書局 一九八七 五〇〇頁 詳細を考證あり 雜詠と云 李嶠集を指すことかわかる

法格 格物叢詠が總論(題法)に引用されていることは山崎氏(注らの論文又頁下参照)の指摘がある

法注を参照 ただし 神田氏は張方は張庭芳の誤りとする これを誤りとし 張庭芳と張方とは別人としたのが 沈田氏である(注を参照) その著必頁「五 泊詠注の傳來と傳本の吟味」に詳しい 以來この説は 山崎氏(注を参照) 湖志日印氏(同上)等の支持を得ている この説はもと 太田晶二郎氏の指摘に始まるという

法泉 宋本 初學記 目錄

(二三四) 紹興四年 歲次甲寅

正月上 元日 福唐劉

本序 藝文印書館影

初學記卷第二十九	獸部			
獅子第一	象第二	麟第三	馬第四	牛第五
驢第六	駢第七	羊第八	豕第九	狗第十
鹿第十一	兔第十二	狐第十三	鼠第十四	猴第十五

初學記卷第三十 鳥部

ここに言う 單題詩とは 李嶠集 に對して 李嶠百廿 詠を指すと考えられる 文苑英華 の枝異に見えろ 單 題詩とは 明版の 李嶠百廿詠 を言う この際 集と 「單題詩」を併記した「梅詩」がその例證となる またこの 枝異は 明版 文苑英華に限る 宋版にはない

印本 一九七六

- 鳳第一
- 鶴第二
- 雞第三
- 鷹第四
- 鳥第五
- 鶴第六
- 鴈第七
- 鸚第八

宋紹興

十六年版

本 中華

書局影

印本 五九

藝文類聚卷第九十
鳥 鳳 鸚 鶴 鷓 鷓 雉

藝文類聚卷第九十四
牛 驢 獸 羊 狗 豕

藝文類聚卷第九十五
象 犀 兕 駃 貍 熊 鹿 麋 羴
兔 獾 獾 獾 果 然 桂 桂 貍 鼠

鶴屬として白鶴、黃鶴、玄鶴を附す。鶴のほか白鳥、黒鳥（以上スワン）、このとり類を合む。

四 敦煌本 李編百廿詠 殘卷の復元と考證

すでに述べたことであるが復元は敦煌本の系統の本文や注が存在しないので唐の天寶六載（七三五年）に成立した張庭芳の李編百廿詠の注と同じ頃成立の初學記（開元二十二年（七三五））を初めとする類書類を参考し敦煌本注とそれに對應する廣大注本のありようを明確にすることに努めた。そのための當面不要に見え、後世附加された格物論とか澤林廣記等の考證ややや傍系のものについての考證あるいは圖の挿入までしてしまつたが、繪解の重要性も理解していただくと幸である。

北宋版本

金澤文庫

善藏書

駿部藏

四部叢刊

所收商務

印書館

太平御覽目錄卷第十三

第九百二卷

獸部十四

羊

第九百七卷

獸部十九

麋

第九百一十五卷

羽族部二

鳳

第九百一十六卷

羽族部三

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

鷓

玉羊星在華山蘇武在

莫言鴻漸力長牧

林 苑十

...

元奴以毛裏雲吞之

史記李斯臨刑謂其子曰更得與汝牽

日隨槐葉長刑逐枝飛

孝子傳謝不備多孝感自免

孝子傳謝不備多孝感自免

聖禽十首 有鳥自丹

孝經種神契鳳皇有九包

孝經種神契鳳皇有九包

...

穴其名曰鳳皇

穴其名曰鳳皇

...

九包應聖瑞

九包應聖瑞

...

初擊甲山崗免不稀

初擊甲山崗免不稀

...

中有桂樹春秋元命包曰月中有自免

中有桂樹春秋元命包曰月中有自免

...

方知感純孝郭郭引兵威

方知感純孝郭郭引兵威

...

穴其名曰鳳皇

穴其名曰鳳皇

...

屬向秦樓側頻過潁水陽

屬向秦樓側頻過潁水陽

...

...

...

...

...

...

...

Pelliot chinois 3738

李端雅詠卷

傳張庭芳注

二玄社敦煌書法叢刊

下釋文字體は改む

免 鳳 等凡出字

(題字)及び諸點は

朱筆 五成文章の

色字も朱筆

*叢刊では李端雅詠

斷簡張庭芳注と

題字私書に改む

玉羊星在華山蘇武在

元奴以毛裏雲吞之

莫言鴻漸力長牧上林隈

漢公孫弘卜式皆有鴻漸之

尤上蔡鷹

初擊甲山崗免不稀

史記李斯臨刑謂其子曰更得與汝牽

目隨槐葉長刑逐枝飛

中有桂樹春秋元命包曰月中有自免

漢殿跼空伏梁園隱跡微

曹靈光殿賦曰狡兔踰伏於踰側

方知感純孝郭郭引兵威

西京記曰梁孝王有兔園以養兔

穴其名曰鳳皇

孝經授神契鳳皇有九包一心合度二曰

屬向秦樓側頻過潁水陽

秦樓女弄玉好

屬向秦樓側頻過潁水陽

鶴黃鶴遠聯翩從鸞鳥下紫煙

屬向秦樓側頻過潁水陽

古詩黃

屬向秦樓側頻過潁水陽

鶴一遠

屬向秦樓側頻過潁水陽

...

屬向秦樓側頻過潁水陽

...

字の傍に。印を附したものは字を改めた。圖みの部分。もとのものは備忘程度と考らる。

羊跪飲微澆俗。行驅夢逸材。

諺問法訓。羊有跪乳之禮。言羊猶知禮而可誠澆俗也。帝王世紀。黃帝夢人執千鈞之弩。驅羊萬羣。驅羊萬羣。能牧民。為善者也。

仙人叱石。

童子馭車來。

神仙傳。黃初平。叱石為羊而去。衛玠別傳。玠少時乘白羊車於洛陽市。共觀。咸曰。誰家璧人。

夜王含星動。晨毛映雪開。

漢公孫弘卜式。皆有鴻漸之翼。羊。羊者。狼星亡。羊。狼。

在於未木為羊也。

蘇武在匈奴。以毛裏雲吞之。玉羊星在華山。

莫言鴻漸力。長牧上林隈。

漢公孫弘卜式。皆有鴻漸之翼。羊。之。間。式。牧。羊。在。山。上。林。花。中。

禿。上蔡鷹。

初擊。平崗禿不稀。

史記。李斯臨刑。謂其子曰。吾欲與汝復牽黃犬。臂蒼鷹。逐狡兔。古詩。平崗走寒兔。

日隨槐葉長。形逐桂枝飛。

莊子。槐入李。春五日。而兔且十日。

而鼠耳。虞喜論曰。月中有桂樹。

漢殿踰容伏。深園隱跡微。

曹靈光殿賦曰。狡兔踰伏於踞側。方知感純孝。春秋元命包曰。月中有白兔。

郭郭引兵威。

考子傳。謝方儲。至孝。有白兔。馴其廬。有賊入。避之。不久。壘。

靈禽十首。鳳有鳥自丹穴。其名曰鳳皇。

山海經曰。鳳九包。出南方丹穴。屢向秦樓側。頻過頰水陽。

應聖瑞。五色成文章。

考經。按神契。鳳皇有九包。一曰口。包命。二曰心。合度。著。韓詩。鳳靈鳥。五色成文章。

秦穆女弄玉。好之。為作鳳臺。

鳴岐今已見。阿閣佇來翔。

國語曰。周之興。鸞鳴于岐山。尚書中候曰。堯即政七十載。鳳皇止庭。巢阿閣。蘿樹。

黃鸞遠聯翮。從鸞下紫煙。

一遠別。遊仙詩曰。赤松臨上游。駕鴻乘紫煙。古曰。鴻。頌曰。茲亦。歌介。矯。翮。紫煙。

翔翔一萬里。來去幾千年。

詠懷詩曰。黃鸞一舉。冲天。翔翔四海。又。鴻。鵠。相。隨。飛。隨。飛。適。荒。裔。雙。翮。遠。

長風須臾萬里逝。續搜神記曰。遼東城門有華表柱。忽有一白鸞。集。徘徊空中。言曰。有鳥有鳥。為。了。令。戚。去。家。十。歲。今。來。歸。城。郭。如。故。人。民。非。何。不。學。仙。去。空。伴。塚。壘。繫。遂。上。冲。天。

已。想。青。田。側。

來遊紫禁前。

永嘉郡記曰。沐溪野青田中。有雙白鸞。多云神仙所養也。左傳曰。衛懿公好鶴。鶴有乘軒者。鶴實有祿位。舜鶴賦曰。吸清露。著於丹楨。

風士記曰。鳴露。此鳥注警。至八月露降。則警。而。鳴。也。毛詩曰。鶴鳴于九臯。聲聞天。

濁文讚曰群而不黨跪乳有敬(中略)謹子法訓(下略)一節氏は後漢の鄭玄この讚は佚文禮は儀禮の篇名。

釋義

跪飲は羊が母乳を跪坐して飲むこと、あたかも禮節あるかの如きふるまいをいう。「敬」はいましめる意。「澆俗」は世俗の輕薄なるふるまいをいう。羊の子が母乳をのみまづいて飲む姿は世人の輕薄を言動を戒めているかのようである。

行駢夢遂枝

帝王世紀黃帝夢大風吹天下塵垢皆去又夢一人執千鈞之弩斷群羊帝寤歎曰風為號令執政者也垢去土后在也天下豈有姓之為相也即風后為牧於牧偶用為相之

考證

史記「五帝本紀二」舉風后力牧常先大鴻(注)正義曰中略帝汪世紀云黃帝夢大風吹天下之塵垢皆去又夢一人執千鈞之弩斷群羊帝寤而嘆曰風為號令執政者也垢去土后在也天下豈有姓風名后者哉夫千鈞之弩與力者也驅羊數萬羣能牧民為善者也天下豈有姓力名牧者也於是依二点而求之得風后於海陽登以為相(四部叢刊二)帝汪世紀は晉の皇甫謐撰輯佚書あり。傍線「」その

他異同が認められるが、この注は史記正義引くところの帝汪世紀に依據してゐると考えられる。特に傍線を以て注本の誤寫であらう。天理本も同じ。駢羊の駢は驅の俗字。沈氏御覽三三七、度引くところの帝汪世紀は駢字を用いる。注は御覽の引用しに先行の類書(修文殿御覽の類)に依據した可能なるある。

釋義

「行駢」とは風后が羊群を追つて遊牧するを、これは將來風后が政治家として民を導き養ふことを意味する。「夢遂材」とは黃帝がその政治を補佐してくる有能なる人物を得ることを夢見ることを、この一句を表現のみにおいて解釋する。或は黃帝が馬車を駢驅つて後の風后を求め得ることを夢見るという意になる。

以仙人叱石去 列女傳(巨黃初平叱石為羊而去)一本黃初平於金華山牧羊盡化為石兄問羊何

在初平叱之皆起為羊也

考證

慶長注本の列女傳は誤認。天理本列女傳とするが、これも今本列女傳には收めず。葛洪の神仙傳に見える。初學

〔記〕九羊 葛洪神仙傳曰黃靈類聚九十四羊作皇初平者丹溪人也年十五牧羊有道士便將至金華山
其兄初起行索初平歷手不得與市中有道士乃隨求弟相見詰畢問羊何在平曰羊近山來兄往視
但見白石平言叱叱羊起於是白石皆起成數萬頭羊亦齊判廣續所收神仙傳皇初平有異同慶
大法本一本云云とするのは白石六帖九羊に叱石化石の項を設けていることより考えて六帖に近い類書によって注解した
可能性がある。

〔注解〕「叱石」とは初學記の羊の事對の標題に亦す如く神仙傳の主眼である。黃皇初平が石に叱つと白石が羊になつたの
である。去は立ち去ることをいふ。廣續本神仙傳底本滙世真仙體道通鑑卷五正統道藏記傳類の藝文印書館四頁におい
て妻子を捨てて金華山の石室に留つたことが書かれている。句意は仙人皇初平は石を叱つて羊に化して後立ち去つた。

皇童子 馭車來 衛矜少時乘白羊於洛陽市共視者感曰誰家瑯君璧人見晉書

〔考證〕 瓌文類聚卷十四羊「衛矜少時乘白羊於洛陽市市人觀之咸曰誰家璧人於是家開州黨遂號曰璧人」
人太平御覽卷三四作衛矜別傳注羊下有車字亦初學記十九美丈夫乘羊車引之。唐太宗降世民稱晉書三六

衛矜別傳六「矜字叔寶字平康風神秀異祖父矜曰此兒有異於衆願吾年老不見其成長耳總角乘羊
車入市見者皆以為玉人觀之者傾都」ここにいう注本の晉書は正史のそれではなく先行の衛矜別傳の如
き晉書であろう。九家舊晉書輯本所引の晉諸公別傳衛矜叢書集成新編二三〇五にこの傳を收める。眞福寺本
漢本四二衛矜羊車も類聚と同系の本文。

〔釋義〕 童子は少羊の衛矜。童子の衛矜が白羊の車に乗って洛陽の町へ行って來るの意。

必夜玉含星動 易類議曰西岳天有玉羊星狼星在木注為羊。

〔注〕玉羊星在華山この注は次の記と并せて施されたもの。注の初めの部分を除く。

〔考證〕 初學記三九羊「簡易編錄類曰太山失金雞西岳上玉羊鄭玄注曰金雞玉羊二岳之精」 太平

御覽卷四敘二易是類謀曰中略五星合狼狐張畫視無日光卷五星上也斯說煌煌夜視無月中略太

山失金雞西岳亡玉羊鄭注太山失金雞者其星亡也其者為風風動雞鳴今期候卷五作其候

者亡故雞亦亡西岳亡玉羊者狼星亡狼在於木為羊也卷五作羊日在木未為羊羊重修緯書集成

一下易下易緯是類謀心頁參照傍線の部分本文の混亂が見られる。狼星が未羊に在る羊星を隱す意であらう。

釋義

夜玉は夜光玉と玉羊星を掛けたもの。夜光玉は月や星の光を受けて光る合星とは夜光玉が星の光を受けてとの光を含んだのように光ること。句意は夜光の玉が星の光とつかひ込んでらあく。

以晨毛映雲開單于以蘇武置大客中絶飲食武以甕并雲食之毛白如雪也又蘇武在匈奴中以羊毛

裹雲吞也

數P三八

夜玉合星動晨毛映雲開注玉羊星在華山蘇武在兜奴以毛裹雲吞之

考證

漢書卷四蘇傳三四律知武終不可發單于單于愈益欲降之迺遊武置大客中師古曰昔米粟之嘗而空者也音于孝反絶不飲食師古曰飲音於祭反食讓曰飲天雨雲武臥切麟雲與旒毛并啜之師

古曰明吞也音宴數日不死勿奴以為神四部叢刑三四旒毛は毛織物の毛。甕と旒は通用字。注本の裹雲

雲とつむ意。白氏六帖元羊一羊毛裹雲蘇武亂竊以羊毛裹雲而吞之とある。注本と漢書の本文の異同が認め

られるのに前者が六帖のような類書によつて注したものと考えられる。數煌本慶大注本の又以下と一致することに注目す。一。

釋義

蘇武飲食に飢えて雲と身をまとう毛皮の毛を食したという故事による。句意は毛甕の白い色が晨の雲に映えて花開いたようである。

莫言鴻漸力長牧上林隈ハム孫ト式皆有鴻漸之力ト式為中郎布衣牧羊上林中也一本漢書莫

日ハム孫弘ト式倪寬皆以鳴漸之翼困於燕雀遠迹羊豕之間ト式牧羊上林中漢武帝見羊肥即使

問之答曰先除惡辯者理人亦然乃拜侯代冷也

數P 莫言鴻漸力長牧上林隈 漢公孫弘卜式皆有鴻漸之翼羊豕之間式牧羊在山上林花中

考證 史記 二二平津侯主父列傳三三「丞相公孫弘者齊菑川國薛縣人也(注略)中略班固稱曰公孫弘卜式兒

寬皆以鴻漸之翼(注略)於燕雀(注略)李奇曰漸進也鴻一舉而進千里者羽翼之材也弘等皆以木材初為俗

所驚若燕雀不知鴻鵠之志也(注略)漆隱曰案謂公孫等味遇為時所輕者飛鴻之志漸受驚於燕雀也

遠迹羊豕之間 韋昭曰遠跡謂耕牧在於遠方(注略)漆隱曰案公孫牧豕卜式牧羊也(四部叢刊三九〇)

漢書 三八公孫弘卜式兒寬傳三八「公孫弘菑川薛人也(中略)家貧牧豕海上(中略)卜式河南人也以用畜

為事有弟弟式脫弟出(注略)師古曰脫脫謂引弟出也脫音他活反獨取畜羊百餘用宅財物盡與

弟式入山牧羊十餘年羊致千餘頭買田宅(中略)上召拜式為中郎賜爵左庶長師古曰第十爵田十

頃布皆天下尊顯以風百姓(注略)師古曰風讀曰韻初式不願為郎上曰吾有羊在上林中欲令子牧之式

既為郎布衣(注略)而牧羊(注略)師古曰踰即今之鞍也南方謂之踰字本作屬並音屠略反歲餘羊肥息師

古曰息生也言羊既肥而又生多也上過其羊所羨之式曰非獨羊也治民亦猶是矣以時起居惡者

輒去(注略)師古曰去除也音丘呂反(注略)母念敗羣(注略)中略贊曰公孫弘卜式兒寬皆以鴻漸之翼(注略)於燕爵(注略)李奇

注略師古曰湯漸卦上九爻辭曰鴻漸于陸其羽烈以為儀鴻水鳥也漸進也(下略)遠迹羊豕之間(注略)師

古曰遠迹其迹也(注略)西部叢刊六九〇(注略)慶太教煌法本と史記漢書本文との異同は注者が原文と要約

引用したものを類書の引用が明白ではないが、原文の要約は類書の手法に似ている。

釋義 「鴻漸」は鴻が地上(注略)そこから次第に空高く翔け昇ると、また次第に高い地位に昇る喩。卜式は羊を牧って高い地位

に昇るが、初め中郎に出せしむるを願わなかつた。「莫言」とは顯官に昇るため羊を牧ったと言つてほしくないの意。卜式が漢

の武帝に認められたのは羊を牧い肥えた良質の個體を増加させたことと獨り羊のみならず牧民の能力が認められたことである。

また買官行為から出たものでなく、誠意に基づくものである。「上林隈」とは卜式が上林苑の武帝の羊を牧うことを任せら

60 兔

格物論曰兔鼠形尾遍彎短毛色褐耳銳且卓口缺長鬚尻九孔跖居趨捷善越雄毛而盈子從口出子或曰兔或曰兔其狡者曰兔又其大者前足寸餘後足數尺行則後足一躍數尺止則仆地謂之蹶兔亦曰兔或謂兔無雄望月而孕也

考證

古今合璧事類備要七十九卷

格物總論

兔鼠形尾遍彎短大如猫毛色褐耳大而銳且卓口缺長鬚

尻九孔跖居趨捷善走紙雄毛而孕生子從口中出其子數方反或曰兔奴侯反其狡者或曰其大者也一種前足寸餘後足幾尺行則用後足跳下躍數尺止則蹶然仆地生於東北西北極邊之地謂之蹶兔亦曰兔或謂兔無雄望月而孕道有能辨之者一足是兔也

任か馬に似た獸といふ。巨(駝)驢に驛馬の乳に牡馬を支配し獸驢馬をうさぎまといふのでこの二獸を文中に採用した。

61 上蔡鷹初擊 李斯上蔡人為秦丞相被刑乃顧其子曰吾欲與黃犬逐上蔡東門逐狡兔豈可得哉

62 平崗兔不稀 沈約詩平崗走寒兔

數P三五八

免 上蔡鷹初擊 平崗兔不稀 史記李斯臨刑謂其子曰更得與汝牽黃犬臂蒼鷹逐狡兔 古詩平崗走寒兔

考證

史記李斯列傳云「李斯者楚上蔡人也(中略)秦王乃除逐客之令復李斯官(中略)竟并天下尊王為皇帝以斯為丞相(中略)二世二年七月與斯五刑論實斯咸陽市斷出獄與其子俱執願

謂其中子曰各欲與若復牽黃犬俱出上蔡東門逐狡兔豈可得乎(漢文類聚)以下之類書類に史記からの引用が認められるが注本は史記から直接要約引用したものであろう。敦煌本の臂蒼鷹鷹の語は今本史記に

は見えぬが沈約の沈約御覽九三六鷹引くとこの史記にこの語が見える。

62 文選 三三 梁沈約角東園詩 一第練 嘯 鷓鴣 平崗走寒兔(相刻本 本書注文選 三三) 崗は岡の俗字。

釋義 上蔡は李斯の出身地。河南省汝南縣の北。「鷹」初撃とは立秋の日に鷹が初めて羽をけはらせらる意。すなわち鷹

狩の開始を意味する。初學記 三十一鷹「春秋」沈命也曰。陰光散為鷹。立秋之日鷹擊。まに漢書 四十七、孫

贖傳「孫贖字子嚴、潁川、魏人也。師古曰、鄭音偃。中略。立秋日中略。救曰、今日鷹始擊。當順天氣。取之。慈

以成嚴霜之賦。四部叢刊傳四十七。句意は立秋の日李斯は上蔡において初めて鷹狩をする。

「平崗」は平らな所。初學記 鷹「截鵲鸞」中略。晉孫楚「鷹賦」中略。擒狡兔於平原。截鵲鸞於河渚。

句意は平原に兎はめすらくない。數多く居る。

○日隨槐葉長。南華真經曰槐之生也。入季春。五日而兔目十日而鼠耳也。

○形逐桂條飛。馬名桂條。又名赤兔。故言逐桂條飛也。一本馬名飛兔。言兔走馬亦走也。

教令三三八 日隨槐葉長。刑逐桂枝飛。莊子槐入李春五日而兔目十日而鼠耳。虞嘉論曰月中有桂樹。

春秋元命包曰月中有白兔

考證 南華真經は莊子の別名。唐の天寶元年、莊子に南華真人の號と追増されてよりの稱。右の注の文現は莊子不

見。藝文類聚 八、槐。莊子曰云々。初學記 三十八、槐。兔目鼠耳。莊子曰。槐之生也。入季春。五月而兔目而

鼠耳。御覽 五十四、槐。淮南子として同文を引くも現行本不見を教示。兔目は槐の新芽が兔の赤い目に似ているこ

と。敦煌本の獺耳は誤寫。

慶大注本は次のような資料に據るか。梁元帝答齊國雙馬書「名重桂條。形圖柳谷。藝文類聚 九十三、馬。において

は答齊國雙馬書と題す。全宋文 十七、馬。梁元帝後園看騎馬詩「良馬出蘭池。連翩驅桂枝。鳴珂隨蹄駛。

輕塵逐影移。藝文類聚 九十三、馬。全宋詩 三五。連翩は馬が翻り走るさま。桂枝は桂條馬に同じであらう。鳴珂は

貴人の馬勒につける飾り玉。蹄駛は馬ががんで疾走するさま。梁元帝の樹名詩に桂枝馬の語が見える。○三國魏志

七呂布傳「布有良馬曰赤兔。曹瞞傳曰。時人語曰。人中有一呂布。馬中有一赤兔。上標點本の功。類文後漢書

七十五臣傳六十五標點本の考。白氏云「赤兔（注略之）」。○魏張揖釋清王念孫疏證漢雅疏證下「飛兔

沿氏春秋離俗覽飛兔（考）。古之駿馬也（考）。高誘注云飛兔（考）。要襄皆馬名也。日行萬里。馳若兔之飛。因以

為名也。開元百段馬（考）。引瑞應圖云飛兔者馬名也。日行（考）。高（考）。下略之（考）。○宇文大學出版社標點本の考。沈氏

御覽八九三馬（考）。引濟雅。白氏云「赤兔（注略之）」。○駿馬（考）。附逐日（考）。飛兔（中略）。赤兔（考）」。初學記三九兔（考）。皆飛

山海經曰天池山有獸如兔。鼠首。以其背飛。名（考）。飛兔（考）。以背（考）。毛飛（考）。山海經（考）。三北山經所收。今本飛兔作

飛鼠（考）。○敦煌本引くとろの（考）。漢嘉論（考）。晉の虞喜の安天論（考）。初學記八月の「視桂（考）。虞喜安天論（考）。曰

俗傳月中仙人桂樹。今視其初生。見仙人之足。漸已成形。桂樹後生（考）。○初學記八月の「扇（考）。扇兔（考）」

春秋元命苞曰月之為言關也。而設（考）。以（考）。兔者陰陽雙居（考）。注（考）。引くと本文の所在未詳（考）。太平御覽

四月「傳（考）。擬天問曰月中何有。白兔搗藥（考）。浴池圖（考）。天池之出有獸如兔。名曰飛兔。以背毛飛。翕（考）。兔（考）」

釋義「隨槐葉」とは槐の芽が成長するにしたがい兔の目の形から鼠の耳の形へと變化することをいふ。句意は槐の芽（兔目は葉

の成長いしむがって形を變化させる。

「桂條は慶大注本と敦煌本注は解釋を異にする。前者は名馬の名とする。句意は兔は桂條馬を追って飛ぶ。後世

の作にざるが宋の梅堯臣の送劉成伯還都詩に「既吹蓮葉舟更逐桂條馬（注）。陰深詩（西三）」という句がある。桂

條馬が如何なる馬か詳らかにせぬが諸例によつて考へるに存在したことは事實であらう。後者は月兔と桂の組合りである。句

意は月に映つてゐる形は桂の枝に向つて飛ぶ兔ということになる。陝西省出土銅鏡（中）。中國出土古鏡圖録所收（文）。物

出版社（一九五九）の120、121月宮圖の一面には月の桂を中心に飛仙と搗藥の兔と蟾蜍（考）が見え、もう一面には月の桂を中心

に左に飛仙、右に飛兔（いづれも飛天の形をしてゐる）。圖參照（考）。また中國歷代銅鏡圖録（一九八一）傳大卽序（考）の漢中期

の鳥獸玉兔搗臼仙人子縁鏡（注）に羽を有する玉兔（圖）が見える。この圖から判斷すると敦煌本のように月兔と月桂

の傳説を採用するに止む方がよいのではないかと考えられる。月兔と月桂と飛仙及び蟾蜍を主題とした作に湖南出土

銅鏡圖録所收の嫦娥奔月鏡(宋)がある(これと同鏡と思える作が新釋漢文大系明治書院の淮南子上の口繪に見え)。



飛兔(月兔)

漢中期(中國歷代銅鏡圖錄)
葛獸玉兔搗臼和人緣鏡



飛仙 月桂 蟾鏡 月兔

120 月宮鏡(陝西省出土銅鏡)
徑20.5釐 樹身鈕、葵花式流雲紋緣。
1935年5月西安市出土。



飛仙 月桂 飛兔(月兔)

121 月宮鏡(陝西省出土銅鏡)
徑13.3釐 圓鈕、樹身鈕、葵花式素緣。
1935年12月西安西郊小土門出土。



飛仙 蟾鏡 月桂 月兔

尊古齋古鏡集(上海古籍出版社)

120 月宮鏡(陝西省出土銅鏡)
徑20.5釐 樹身鈕、葵花式流雲紋緣。
1935年5月西安市出土。

60 漢月澄秋色 月中有玉兔月陰之精也或成戰象兔也

61 梁園賦 漢書梁孝王有園雪賦曰遊於兔園也 謝惠連雪賦曰不悅遊於兔園也

數百三十八 漢殿陰容伏梁園隱跡微 魯靈光殿賦曰狡兔淫伏於爾側西京記曰梁孝王有兔園以養兔

考證 慶大注本と敦煌本は本文を異にするが、典據を共通するものがある。

60.5 漢文瀨際 九五兔 張衡靈憲曰月者陰精之宗積而成獸悉兔也 陰後漢文子五九。

60.6 劉宋謝惠連雪賦 梁王不悅游於兔園 儀注此假未客以為辭也 漢書曰梁孝王文帝子也 西京雜記曰梁孝王好宮室苑囿之樂築兔園也 胡刻李善注文選十三卷和刻石法文選十三卷附訓。○漢書四七文

三王傳 於是孝王築東苑方二百里餘里 標點本 史記五十八梁孝王世家司文 法曰一法應曰中略 汪儀曰括地

志云苑園在宋州宋城縣東南十里 葛洪西京雜記云梁孝王苑中有別洛後巖檣龍岫鴈池鶴洲鳧島 諸宮觀相連奇泉佳樹 魏念異獸錄不載備 俗人言梁孝王竹園 四部叢刊四五六 標點本。

○後漢王延壽增靈光殿賦 狡兔淫伏於爾側 獲狄擊檣而相追 儀注曰說文曰淫 躍也 壯樂切 爾音父 論曰 淫 繞足而相斗上 橫木刻狡兔形置木於背也 根頭刻獲狄以手擊而相追狄 猴類 和刻本文選

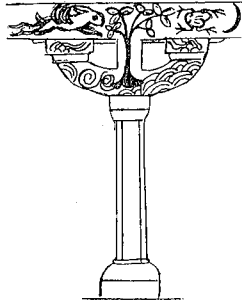
工、以、胡刻本文選十二卷。敦煌本の跡は村の俗字。村側はますが、この横木のかたわら。敦煌本の西京記は雪賦の注及び史記の注所引の洒涼瀨記を指す。西京記と稱す。書漢文瀨際にも散見する。

釋義 漢月は天の川と月。漢月秋色に澄むと讀むべきか。秋の澄んだ空に漢月が浮んでいるの意。これに對して敦煌本にお

いは、漢殿と魯靈光殿とすべきである。文選の賦の王文考(延壽)について注を記している。ここに述べられている逸話を少し長くながく引用する。善曰范曄後漢書曰王逸字叔師南都宜城人也子延壽字文考有讀賦遊書作

靈光殿賦後漢書亦述此賦未成及見延壽所為甚奇巧遂輟翰而去後泯木死時年二十餘。○鏡曰范曄後漢書云王延壽父逸欲作此賦命文考往圖其狀文考因頽之以簡其父父曰吾無以加也時

蔡邕亦有此作、十年不取、僅見、文考、此賦、遂隱而不出、文考時、二十至、二十四、過漢江、溺而死、和刻本、文選、十一、二、適宜訓點を加えり。李崎が宰相として權力を振って、時に時、文名甚だ高く、この逸話に共鳴しはす。しかつてこの賦が念頭にあったと考えられる。まに、梁園に對するに、漢殿の方が、漢月よりおもしろい。本李崎はこの注を見ている。范曄の後漢書の逸話は當然讀み知つてゐる。この後漢書は今は散佚して諸本の注や後世の輯本にその跡を止める。敦煌本は漢殿に容を跽伏しと讀む。跽伏とは注に言うように、宮殿のますがた(斗栱)の横木に兔を彫刻したるもの。句意



斗栱に於ける跽伏想像圖

は、漢の御殿の斗栱の横木に兔が彫られてゐる。

梁園は注によつて知られるように漢の文帝の子梁の孝王の豪華な庭園である。兔園といふ。慶大本は、梁園雪の暉に映けりと讀んでおく。句意は、梁園は雲の光に輝いてゐる。かつて孝王が宴會をして、華やかな様子が思われる。敦煌本は梁園に跡を隱微すとも讀んでおく。隱微はかくれておこなふこと。句意は、孝王が豪華を誇つたに様も梁園(兔園)に微かにその跡を残すのみだ。

唯當感純孝、郭郭引兵威、後漢方諸居喪、孝感自兔來盜賊美之、不入其里也。一本孝子傳曰、顧泰、吳人也、父女亡、廬于塚次、為劫賊所逼、忽有自兔走入郭郭、人使兵逐兔、走赴廬、賊亡而走、太守乃表其門閭也。

數百三三八 方知感純孝、郭郭引兵威、孝子傳、謝方儲、至孝、感自兔、馴其廬、有賊入、避之、不入、蠶

考證 初學記 卷九 一 游墳 謝承激漢書曰、方儲字、聖明、幼喪父、事母孝、母死、乃負土、成墳、種奇樹于株

變焉、樹其上、自兔遊其下、類語として次のものがある。後漢書 列傳 五下 蔡邕 一 邕性篤孝、母常滯病、邕嘗

自非寒暑、節變未嘗解襟帶、不寢寐者七旬、母卒、廬于塚側、動靜以禮、有兔馴擾其室、傍又木生、連理

遠近、奇之、多往觀焉、四部書影刊、初學記 卷 履室 范曄後漢書、慶大本の方諸は方儲の誤りである。

に於て盜賊の記事未詳。謝承の後漢書は佚書であり類書や後世の輯佚書を見る限り注本の本文なし。また一本の孝子傳も未詳。郭郭の句の典故としては注本の本文が存在しないと考へたい。謝承の後漢書及び孝子傳の本文が存して存しているというところである。また隋書五列傳三十七、孝義「華林、波郡臨河人也。幼喪父、事母以孝聞。家貧、傭賃爲養其母。遇寒、秋容貌毀悴、鬻鬢鬢、改州軍威、嘆異之。及母終、之後遂絕、掘木、斂盡、未嘗落。廬於墓側、自土成墳、有人欲助之者、秋輒拜而止之。大業初、識狐皮、郡縣大獵、有一兔人逐之、奔入秋廬中、匿秋膝下。獵人至、廬所異而免之。自爾此兔常宿廬中、馴其左右、郡縣疑其孝感、以狀聞、楊帝降侯爵、表其門閭。後者盜起、常往來廬之左右、咸相誡曰、勿犯孝子。鄉人親秋而全者甚衆。」(標點本100)御覽卷之九、免兔が典故に近い。ただし、親に孝を盡し、親の死後墓近くにおりる結ぶ鳥獸が馴れ親しか、賊も孝子を害さざいという孝子傳の一典型があるので、注本の引く方儲の傳もこの典型の一つである。

釋義

慶大法本は「唯に當に純孝に感して、郭郭より兵威を引くと讀み、篤い孝心に感じて賊は町から軍兵を引いたの意。敦煌本は「方に知る純孝に感し、郭郭より兵威を引くと讀み、慶注本とはば同意。「純孝」は篤い孝心。「郭郭」は城郭すなわち町。

洋陽明注「春秋元命苞、日月所設以詹諸、与完者陰陽、雙居月中、有玉兔、月陰之精、皮獸、象兔。」

宋本 初學記 三十九 免

事對 には「月赤 背背飛」

の外「擾愛 環山」、「藹 藥和丹」、「爰爰 趨趨」等がある。

兔 爾雅曰「兔、子也。」其迹、迹、絕、有方、依、春秋、暹、斗、樞、曰、玉、衡、散、爲、兔、禮、記、曰、祭、宗、廟、之、禮、免、曰、明、視、伏、伏、去、今、注、曰、建

平元年山陽得白兔、目赤如朱、山海經曰、天池山有獸如兔、鼠首、以其背飛、名飛兔、以背、上毛飛去、王充論衡曰、免視雄、毫而孕、及其生子、從口中、瑞應圖曰、赤兔者、瑞獸王者、盛德則至、事

目赤背飛、伏侯古、今注曰、成帝建平元年、山陽得白兔、其目赤如朱、枯地、魚曰、天池山有獸如兔、鼠首、以其背飛、名飛兔、以背、上毛飛。

鳳 雄曰鳳雌曰凰鸞鳳雛靈鳥見則天下太平也事林廣記曰海上十洲鳳麟洲在西北海中地方二千五百里四面有弱水金毛不浮上多麒麟鳳凰因而為名出反魂香續絃膠又名集弦膠仙人者

鳳凰喙麒麟角合煎作膠青色如碧玉一名連金泥此神物也上有青花之宮素丹林府皆神仙上真之所居治焉世人不能得而到也。頭注則天下之間格物論の挿入を指示格物論曰鳳瑞應鳥太平之

世則見其為形也雞頭蛇頸燕頰龜背魚尾五彩色也高六尺計非梧桐不棲非竹實不食非醴泉不飲凡所棲止衆禽必隨之而集故曰羽蟲三千六百六十而鳳凰為之長然象鳳有五色多赤者鳳多青者鸞

多黃者鶴多紫者鸞多白者鶴也(傍に○を付した語は次の古今合璧事類備要の格物總論に缺く)

考證 宋の陳元觀の事林廣記と古今合璧事類備要の格物總論は宋のものであるから後世のものである。唐代の注では

い。この總論といふべし注は唐の注にはなかつたと考へられる。せせり羊・兎の部の總論には格物論しか存しなからである。

初學記 鳳一舞也 汎演圖曰鳳火精 洗詩草蟲經曰雄曰鳳雌曰凰 其雛為鸞鳥或曰鳳皇。一名鸞鳥也。一名鸞。事林廣記 五集卷六、仙靈遺蹟、海中十洲、鳳麟洲「在西北海中地方一千五百里、洲四面弱水繞之、瀟灑不浮、不可越也。洲上多鳳麟、數方為群、又有山川池澤及神藥百種、亦多仙家、煮鳳喙及麟角

合煎作膠、名之為續弦膠、或名連金泥、此膠能續弓弩、已斷之、及連刀劍、折之、金更以膠連續之處、使力士射之、他處力斷、所續之際、終无损、又有昆音及可切玉、常滿盃、夜致中、處比明、甘露亦滿、晶明甘美、服之、能延長生(元禄二年刻本、新編海内百書院影印本、竹見、鴻毛はおおりの毛、極めて輕いものといふ。

事林廣記は元版明版等々存在する。内閣文庫藏の西園精舍元刊本と明弘治九年詹氏遠德精舍刊本が注

文引用事林廣記の本文に一致する。参考までに元版を引用する。

新編某國增 事林廣記 前集卷六、仙境類、「在西北海中地方二千五百里、洲四面有弱水、金毛不浮、上多麒麟、鳳凰、因而為名、出反魂香、續絃膠、又名集弦膠、仙人者、麒麟、鳳凰、因而為名、出反魂香、續弦膠、又名集弦膠、仙人者、鳳凰、喙、麒麟、角、合煎、作膠、青色、

麒麟、鳳凰、因而為名、出反魂香、續弦膠、又名集弦膠、仙人者、鳳凰、喙、麒麟、角、合煎、作膠、青色、

麒麟、鳳凰、因而為名、出反魂香、續弦膠、又名集弦膠、仙人者、鳳凰、喙、麒麟、角、合煎、作膠、青色、

麒麟、鳳凰、因而為名、出反魂香、續弦膠、又名集弦膠、仙人者、鳳凰、喙、麒麟、角、合煎、作膠、青色、

如碧玉一名連金泥此神物也上有青華之宮素丹林府皆神仙上真所居治焉世人不可得而致也
(六ノリ)。○印は筆者が付す。この引用文の原典は東方朔の海内十洲記(十洲記ともいふ)である。参考までに引用
しておこう。○海内十洲記「鳳麟洲在四海一鳳麟洲在四海中央北方一千五百里洲四面有弱水繞之
鴻毛不浮不可越也洲上多鳳麟數萬各為羣又有山川池澤及神藥百種亦多仙家者鳳喙及麟角
合煎作膏名之為續絃膠或名連金泥此膠能續弓弩已斷之弦刀劍斷折之金更以膠連續之使力
士擊之他處乃斷所續之際終無斷也武帝天漢三年(中略)四月西園王使至獻此膠四兩吉光老表
武帝受以付外庫不知膠表之物之妙用也(中略)又時武帝幸華林園射虎而督弦斷使者時然罵又
上膠一分使口濡以續督弦帝驚曰異物也乃使武士數人共射擊之終日不脫如未續時也膠
色青如碧玉吉光毛表黃色蓋神鳥之類也(中略)周穆王時西胡獻昆吾割玉刀及夜光常滿玉刀
長一尺五寸受三升刀切玉如切泥五是白玉之精光明夜照冥夕出玉於中庭以向天比明而水汁已
滿於玉中汁甘而香美斯寶靈人之器秦始皇時西胡獻切玉刀無復常滿玉見如此膠之所出從
鳳麟洲來劍之所出也從流洲來並是也(中略)古今逸史云續絃膠藝文類聚九十鳳引十洲記
作集弦膠御覽九十五鳳同參照李劍園輯釋唐前志怪小說輯釋(上海古籍出版社)。

右の長文の引用から推察すると(元明)版と和刻本の淨林廣記との本文の相異は依據した十洲記の本文の相異
によるものであろう。藝文類聚や太平御覽に引かれた系統の十洲記に依據した(元明)版と現存する近世の諸本の何
れかを依據した和刻本に分けられるのである。現存の十洲記の諸本間における異同は少ない。類書は孫引が普通であるので
(元の泰定二年版と底本とどうか不見)

特に唐宋の類書は本文の古態を傳えるものが多い。すでに述べたように唐代の本来の法には總論に當る部分が無かつ
た。と考えられるので、敦煌本を考へる上では不要である。一方格物論もまた本来の法を考慮する上では不要である。一應
検討する必要がある。○格物總論(格物論と同義と考へられることはすでに述べた)「鳳翔鷹鳥太平之世則見是以

不常^レ有^レ也^ニ其^レ爲^レ形^也也^ニ雞^頭蛇^頸燕^頂龍^背魚^尾五^彩色^高六^尺許^雄曰^鳳雌^曰鳳^彼其^性非^梧桐^不棲^非竹^實不^食非^醴泉^不飲^八所^棲止^聚禽^必隨^文而^集故^曰羽^嘉三^百六^十而^鳳凰^爲之^長然^象鳳^者有^五多^亦色^者鳳^多青^色者^鸞多^黃色^者鸞^多紫^色者^鸞多^白色^者鸞^{不可}不^親也^次今^合璧^爭類^備要^云云^化訓^點を^加え^ら注^本に^缺く^部分^には^傍線^を付^す。

似^有鳥^自丹^穴一^之山^有鳥^其形^如鶴^云彩^而文^名曰^鳳凰^也一^本山^海經^曰丹^穴山^有丹^穴出^鳳凰^{爾雅}云^去中^州以^南戴^日爲^丹穴^也

似^其名^曰鳳^凰雄^曰鳳^雌曰^鳳亦^曰鸞^其文^多赤^曰鳳^多青^曰鸞^也
數^百三^七八^靈禽^十首^鳳有^鳥自^丹穴^其名^曰鳳^皇山^海經^曰鳳^出南^方丹^穴

○**考證** 藝文類聚 卷九 祥瑞 鳳皇 山海經 曰 丹穴之山 有鳥狀如鶴 五色而文 名曰鳳 鳳(以下略) ○山海經 鄒瑋注 一 又 東 云 百 里 曰 丹 穴 之 山 其 上 多 金 夫 丹 水 出 焉 而 南 流 注 于 激 海 (注略) 有鳥焉 其 狀 如 雞 又 云 而 文 名 曰 鳳 皇 (以下略) (四部叢刊) ○瀟湘 釋 北 九 野 一 北 齊 州 以 南 戴 日 爲 丹 穴 距 去 也 齊 中 也 (南北朝刊) 中 世 的 員 汲 古 書 院 四 部 叢 刊 中 萬 曆 三 年 版 和 刻 本 註 疏 六 卷 的 員 汲 古 書 院 以 上 同 慶 大 注 本 口 鄒 瑋 注 之 距 去 齊 中 在 本 文 に 置 換 へ 換 へ て であ っ 。

○**漢文類聚** 卷九 祥瑞 瀟湘圖 曰 鳳皇者 仁鳥也 雄曰鳳 雌曰皇 同鸞 孫氏 瀟湘圖 曰 鸞鳥 鳳皇之位 ○初學記 三 鳳 花 綺 草 蟲 經 曰 雄 曰 鳳 雌 曰 皇 其 離 爲 鸞 鸞 或 曰 鳳 皇 (一名鸞 鸞 一名鸞) ○太平御覽 卷九 鸞 一 鸞 慶 三 輔 決 錄 注 曰 字 縹 字 公 文 (中略) 太 史 令 蔡 衡 對 曰 凡 象 鳳 者 有 五 多 亦 色 者 鳳 多 黃 色 者 鸞 多 青 色 者 鸞 多 紫 色 者 鸞 多 白 色 者 鸞 今 此 鳥 多 青 者 乃 鸞 非 鳳 也 右 的 引用 文 にお いて 似 口 山 海 經 主 典 據 と する 一 本 と し た の は 典 據 と し た 書 名 が 示 さ れ ず た か ら であ っ 。

ま だ 現 行 の 山 海 經 が 如 雞 として いる の に 對 して 藝 文 類 聚 等 所 引 の 山 海 經 が 一 如 鶴 として いる 點 を 注 目 す べ き であ っ 。

初學記 鳳

所引の(晋)皇甫謐帝王世紀にも大鳥(鳳)と考えられていた)を「其狀如鶴」と言っている。「如鶴」と鳳を考ふる根據も同書所引の許慎說文に「鳳神鳥也(中略)燕頰雞喙」と表現していることから、山海經の本文は異同が生じたことも納得である。敦煌本所引の山海經本文は原文の意を汲んで要約したもので、須知録の唐代の注はこの程度の簡略なものと考えられる。瀾雅も後の注の可能性あり。

敦煌本にはぬに對する注が見えざい、廣大注本の注は藝文類聚所引の孫氏瑞應圖以下引用したものの内、太平御覽所引の三輔決錄注が最も近い。この本は類書類より輯佚した本文(三酒堂叢書等)が存するのみ。御覽は先行する唐代以前もの類書(梁・陳・林・遍・露、北齊・修文殿御覽の類、いずれも佚書)から引用したものであろう。

釋義 丹穴とは本末丹砂(赤朱色)の出る穴。ここで言う丹穴は南方に在って、日の下にある地。鳳凰は赤色といつて、丹砂の色をしていざ考えられる。句意は「鳥有り丹穴自らす(鳥)かいて丹穴より現れる」。

417 其の名を鳳凰と曰ふ(その名を鳳凰という)。

418 九包應靈瑞。九包者一曰歸命。二曰合度。三曰耳聰。四曰屈申。五曰色形。六曰首冠。七曰距鉤。八曰音激揚。九曰腹有尸也。一本天光曰鳳形。麟前鹿后蛇頭魚尾。鴛鴦細脰。文龜背龍膺。燕頰雞喙。是九包也。

419 五色成文章。鳳則龍膺龜背等五色成文也。一本五彩。暮則宿丹穴。見則天下太平也。

數(三三三) 九包應靈瑞。九成文章。考經授神契。鳳皇有九包。一曰心合度。二曰包命等。韓詩鳳靈鳥。五色成文章。

考證 初學記 三ノ鳳 一論語摘叢聖曰鳳有六像。九苞(中略)九苞者一曰口包命。二曰心合度。三曰耳聰。

達四曰舌詭伸。五曰彩色。九六曰冠。冠州。七曰距。鏡鉤。八曰音。激揚。九曰腹。文尸。(註と屈申通用字。詭伸はのびらちみ。○白沢は性。三ノ九。鳳一。九苞。二曰歸命。三曰心合度。度天度也。三曰耳聰。達。四曰舌屈伸。

五曰彩色。九六曰冠。冠州。州當朱色。七曰鏡鉤。八曰音。激揚。九曰腹。文尸。所由出入。二同古今合璧事類。

鳳事類 九苞。苞と包は通用字。○初學記三、鳳「許慎說文曰鳳神鳥也」（漢書卷之九）天老曰鳳像麟前鹿

後蛇頸而魚尾龍文龜背燕頤雞喙五色備舉（說文段注四）也。鳳。韓詩外傳八（四）にも類文ありとも。說文

の本文と異同あり。說文が適當。韓詩外傳の引用は藝文類聚九十九祥瑞下鳳に見えも。

〇敦煌本引く孝經援神契にその出處未詳。〇に引く說文の「五色備舉」も「五色成文章」の典據に非ざるを得。

敦煌本引く韓詩は韓詩外傳であらうが、その本文の要約であらう。○韓詩外傳八「漢帝即位中略乃召天老

而問之曰鳳象何如天老對曰夫鳳象鴻前麟後蛇頸而魚尾龍文而龜身燕頤而雞喙戴德負仁抱

中扶義（小）金大音鼓延頸奮翼（五）五彩備明舉動八風氣應時用食有質飲有儀往即文始（未）即嘉

成惟鳳能通天社應北靈律（五）音覽九德天下有道得鳳象之一則過之得鳳象之二則鳳翔之

得鳳象之三則鳳集之得鳳象之四則鳳春秋下之得鳳象之五則鳳沒身居之（中略）皇天降祉不

敢不承命鳳乃止帝東園集帝於桐食帝竹實（身）不去（四）漢書八宣帝紀「五鳳三

年（中略）已輒有司帝祠上帝宗廟三月辛丑鸞鳳又集長樂宮東闕中樹上張晏曰門外闕凡衛馬之

裏樹也飛下止地文章五色留十餘刻吏民並觀（百納本）四部叢刊八（四）標點本八（四）藝文類聚九十九祥瑞下鳳皇。

古今合璧事類卷之三鳳文章五色也。

〇の慶大注本に白氏六帖に近い本文を典據としているが、尚初學記の論語摘袁聖も参考にするべきである。一本

注は說文に依據したものであつた。敦煌本注は既に述べた通りである。

〇の慶大注本の龍膺龜背の語は說文の一龍文龜背に據つたものであつた。ただし、膺と文の異同を證明する

資料は未詳。一本注は說文の「暮嶺升宮見則天下大安寧」右初學記所引說文。段注は不可。五彩は

論語摘袁聖へ右に引くの一五曰彩色光（同）白氏六帖所引文に據つたものであつたを典據とする。

釋義

44. 九包(包)と苞(同義)は鳳凰の九種の羽の色。靈瑞は神聖なものである。敦煌本の聖玉瑞も同義と考えてよからう。句意は九種の鳳凰の羽の色に皇帝のめでたい神聖さしるしに符合している。

45. 五色は引用文において知られるように鳳凰の體の五つの特徴。句意は鳳凰の體の五種の模様は聖天子のめでたい治世を象徴している。

46. 屢向秦樓側。秦穆公女名弄玉。為起鳳樓。與蕭史居。每吹蕭。有鳳凰集。又周時。鳳鳴于岐山。

47. 頻過洛水傍。黃帝遊洛水上。鳳凰銜圖。置黃帝前。一本。周靈王太子晉吹笙。感鳳於洛水之陽也。

教P三三三 屢向秦樓側。頻過潁水陽。秦樓女弄玉好□□。見其事。

考證 藝文類聚 卷之八 仙道 列仙傳 曰 蕭史秦繆公時善吹蕭能致白鶴孔雀公女弄玉好之以誓焉遂

教弄玉作鳳鳴居數十年鳳皇來止其屋為作鳳臺夫婦止其上不下數年一旦皆隨鳳皇飛去故

秦氏作鳳女祠雍宮世有蕭聲(漢 西晉蕭 九十鳳 初學記 十六蕭致鶴) ○太平御覽 九五 鳳 列仙傳

曰 蕭史教弄玉作鳳鳴居數十年吹蕭作鳳聲鳳皇來至其屋為作鳳臺夫婦止其上 一日一夜皆

隨鳳皇飛去(名) ○列仙傳上 蕭史 蕭史有秦樓公時人也善吹蕭能致孔雀白鶴於庭樓公公有女

字弄玉好之公遂以女妻焉月教弄玉作鳳鳴居數年吹似鳳聲鳳皇來止其屋公為作鳳臺夫婦止

其上不下數年一旦皆隨鳳皇飛去故秦人為作鳳女祠於雍宮中時有蕭聲而已(以下贅略之) 琳琅

秘授漢書本義書集液新篇 卷中 正統道藏 第八冊 記傳類 仙真 藝文版。

○太平御覽 九五 獄鳥 鷲 淵詒 曰 周之興 鸞鷲鳴岐山(名) 注 沃六 船 九 鸞 官 鳴 岐 陽 ○ 淵詒 周 語 上 一 律

氏 解 惠 王 十 五 年 一 王 門 內 史 適 內 史 周 太 夫 過 其 石 中 路 周 之 興 也 鸞 鷲 鳴 於 岐 山 三 名 云 鸞 鷲 鸞 鷲 鳳 之 別

名 也 詩 云 鳳 皇 鳴 矣 于 彼 高 岡 其 在 岐 山 之 巔 乎 (四部叢刊 子部 岐山は周の發祥の地)。

芝蕭史と弄玉の故事は列仙傳に依據する。慶大本の注は、これを要約したものと考えられる。敦煌本の注は脱落部分

があるが、これも列仙傳に據る。廣大本注の一本は瀕語に據る。ただし、後世の補注であらう。

初學記 三十一、鳳一銜圖春秋合識圖曰黃帝生就處洛水上與大司馬容光等臨觀鳳皇銜圖黃帝前

帝再拜受鳳圖宋均注玄扈石室石記一變九、祥瑞下鳳皇。御覽九二五、鳳。○藝文類聚 四四、西竺一列仙傳曰

王子喬者周靈王太子晉也。好吹笙作鳳鳴遊伊雒間。又珠璣秘室叢書列仙傳上。

右の引用において明らかきまうに春秋合識圖を典據とする。一本は陽之問の相異はあるが列仙傳に依據する。敦煌本には

本は注を全く脱落しているが春秋合識圖に依據したものと考えられる。一本は恐らく後世の注であるので、敦煌本には關係を以てあつた。

釋義 鳳は秦樓の側に向ひ、句意は鳳凰が辱は蕭史弄玉の居る秦の鳳樓にやつて来る。

鳳凰は洛水の傍を遊る。句意は鳳凰は漢帝は洛水の傍の玄扈に坐し、洛水の流水を觀ていと、聖天子を賞めて鳳凰が洛水を銜えて帝前に置く。玄扈は陝西省洛南縣の西、洛水の南にある山の石屋。天子の居處をいふ。

洛圖は洛水より現れた未來記豫言書

鳴岐今已見 周語云周之將興鸞鷲鳴于岐山鸞鷲即鳳凰

阿閣停來翔 堯耶政 鳳凰集于阿閣也 一本韓詩外傳曰黃帝時鳳皇集於阿閣也

數P三七三八 缺文

考證 鳳注に引く周語は考證所引の瀕語周語である。鳳注の「又周時岐山」は鳳の注と考えてよい。

此の注の典據は尚書中候もしくは帝王世紀である。韓詩外傳鳳考證所引参照は阿閣の語は見えず、東園となつてゐる。尚書中候の本文は引用類書によつて内容に異同が認められるので、諸本を引用する。

藝文類聚 九、祥瑞下鳳皇。尚書中候曰堯耶政七十載鳳皇止處阿閣。初學記 三十一、鳳皇

尚書中候曰堯耶政七十年鳳皇止處。伯禹拜曰黃帝軒轅時鳳皇集阿閣。○太平御覽 九二五、鳳

「尚書中候曰黃帝時天氣休通五行期化鳳皇業阿闕識樹注曰阿闕名宮中之御門曰闕鳳皇於
 巢窟從而出讖鳴於朝廷之樹二休は休の誤字といふ。休通は盛んをいふてい。氣が行き渡ること。期化は五行の
 氣あまのく行き渡ること。重修緯書集成注尚書中候の頁は「相化」に作るべしとする。 ○初學記 三十九 鳳敘
 事一皇甫謚帝王世紀曰黃帝服齋于中宮坐于窺慮洛上乃有木鳥雞頭雞喙喙喙喙喙喙喙喙喙喙或止帝之東園
 或巢阿闕」。

釋義 岐に鳴いて今ひに飛ん。 句意は周の世に鳳凰が岐山に鳴いたといふが今ここに鳳凰のめづかしい姿が現れるよ御
 世である。

此阿闕に來り翔らんを作つ。句意は鳳凰が阿闕にやて來り空翔けるのを待つている。

上宋本初學記 三十一 鳳

下内閣文庫藏 西園看舎 元版 澤林廣記 筆者
書名から考へて元以前宋本に元本が存したはずである。

鳳 隸

雜菴獄獄或曰鳳皇一名鶖鶖名鷄毛詩詠曰鳳非梧桐不棲非竹實不食論摘表聖曰鳳有六像九苞六像者曰頭像天曰目像曰三曰背像月四曰翼像風五曰足像地六曰尾像

繚九苞者曰口包命二曰心合度三曰耳聰達四曰舌出伸
 五曰彩色六曰冠冠矩州七曰距鈞八曰音激揚九曰腹平
 行鳴曰歸鳩止鳴曰棲扶夜鳴曰善教晨鳴曰賀出飛鳴曰即
 音知我唯黃持竹實來致子欲若九夷從鳳鳴也慶天也

朱宋也也戸出出八地處天下和平者許慎說文曰鳳神鳥也天老
 曰鳳像鸞前廣後蛇頸而肉尾龍文龜背鸞領雞喙五名備
 舉出東方君子之國翔翔四國之外過黃崙欲飲砥柱濯羽弱
 水暮宿丹台見則天下大安寧字從鳥凡聲也鳳飛則群鳥

新編纂圖增類羣書類要羣林廣記目錄

西 類 陳 元龍 編

卷之六 仙靈勝境 十大洞天 二十四治 三十六洞天

七二福地 海中四山 海三岳 海上十洲

瀛洲 地方四千里去華七千里正圓會稽一名瑤洲上青
 又蓬萊諸之號或曰神山或曰仙山或曰靈山或曰閼風或曰崑崙

又崑崙之號或曰崑崙之山或曰崑崙之丘或曰崑崙之墟或曰崑崙之野
 又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟

又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟
 又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟

又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟
 又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟

又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟
 又崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟或曰崑崙之墟

紀鶴 (鶴) 名仙驥丹哥丁令威也。浮丘伯相鶴經曰鶴ハシ隱鳥也ハシ而出於陰ハシ因金氣乘ハシ火精而自養ハシ金數九ハシ火數七ハシ故七年ハシ小變ハシ十六年ハシ大變ハシ方六十年ハシ變止ハシ千六百年ハシ形定ハシ體尚潔ハシ故色白ハシ聲聞天ハシ故頭赤ハシ食於水ハシ故隊長ハシ軒於前ハシ故後指短ハシ栖於陸ハシ故足高ハシ而尾凋翔於雲ハシ故毛豐ハシ而肉棘ハシ大喉ハシ以吐ハシ怕故ハシ修頸ハシ以納ハシ新ハシ故壽不可量ハシ蓋羽族之宗長ハシ而仙人之驥驥也ハシ

考證 この總論といへば部分浮丘伯相鶴經を中心にして組立てられてゐる。初めの「鶴名仙驥丹哥丁令威」は鶴の異稱であるが「仙驥」「丹哥」という二字の熟語は宋以後のものと考えられる。この總論の相鶴經の本文は藝文類聚を初學字記三ノ鶴に見えが、古今合璧事類備要十四鶴の格物總論に依據したものと考へられる。

○宋葉夢得石林詩話中「元豐間嘗久旱不雨中略」王珪「元祐初相禹正作滄州詩中略」元祐「政厚之云德驥籟雲第仗下佛化吹雨天流」歷代詩話藝文印書館。○宋葉廷珪海錄碎事三上鶴門「丹歌趙自然詩丹歌時北舞來去跨雲鸞丹歌鶴也」明萬曆二十六年刊本新興書局。○藝文類聚五白鶴「續搜神記曰遼東城門有華表柱忽有白鶴集徘徊空中詩曰有鳥有鳥丁令威去家千歲今來歸城郭如遊人民非何不學仙去空伴家靈藥遂上冲天今流布于靈犀山後化鶴歸本文の異同あり。次に今本を記す。○搜神後記「丁令威丁令威本遼東人學道于靈犀山後化鶴歸遼東城門華表柱時有少年舉手欲射之鶴乃飛徘徊空中而言曰有鳥有鳥丁令威去家千歲今始歸城郭如遊人民非何不學仙去空伴家靈藥遂高上冲天今遼東諸丁云其先世有升仙者但不知名字耳」秘冊景出明萬曆刊本漢書漸編。○古今合璧事類備要十四鶴「格物總論鶴人如鶴中略」

浮丘伯相鶴經鶴陽鳥也而遊於陰因金氣乘火精以自養金數九火數七故十年小變十六年大變十六年形定體尚潔故色白聲聞天故頭赤食於水故隊長軒於前故後指短栖於陸故足高而尾凋翔於雲故毛豐而肉棘大喉以吐怕故修頸以納新故壽不可量中略。故足高而尾凋翔於雲故毛豐而肉棘大喉以吐故修頸以納新故壽不可量中略。

昔短棲於陸故足高而尾凋翔於雲故毛豐而肉棘大喉以吐故修頸以納新故壽不可量中略。

昔短棲於陸故足高而尾凋翔於雲故毛豐而肉棘大喉以吐故修頸以納新故壽不可量中略。

略)蓋羽族之宗長三十一仙人之驥也。

右の引用文において明らかでないに總論行宋代に加えられたと考えられる。宋代の類書冷澗筆談の湘鶴經には「浮丘伯の名を冠している。初學記には冠していない。また、仙驥「丹哥」等宋代の用例と考えるべきである。

必黃鶴遠聯翩了了本江提詩曰黃鶴飛遠相鶴經曰鶴陽鳥也因金氣依水精行必依洲鳩止不集林木

蓋羽族之宗長仙人之驥驥千六百年形定也色白不食謂仙禽也

必從鸞下紫烟言鸞鶴俱是仙人所乘故言從鸞向烟霧也一本郭景純詩曰鶴乘烟江又通詩曰乘鸞

河烟霧也

數中三三八 黃鶴遠聯翩 從鸞下紫烟 十古詩黃鶴一遠(以下缺)

考證 必陳江總 別列袁昌州詩「黃鶴飛飛遠 青山去去愁」(藝文類聚 三十九 別)慶大注本の江總詩の黃

鶴と黃鶴と同義であろう。鶴は白鳥であるが當時は鶴の一種と考えられていた。○初學記 三十 鶴「相鶴經曰鶴

者陽鳥也而遊於陰因金氣依火精以自養中略千六百年形定體尚潔故其色白中略木土之氣

内養故不表於外是以行必依洲鳩止不集林木蓋羽族之宗長仙人之驥驥也中略復百六百年不

食生物中略千六百年飲而不食鸞鳳同為群聖人在位則與鳳凰翔於朝中略陽鳥仙禽 淮南

八公相鶴經曰中略鮪鮪解鶴賦曰儗胎化之仙禽慶大注本の水精は「火精」の誤。同じく洲鳩

は洲鳩の誤。「驥驥」は鶴を名馬にたとえる。句は郊外。胎化之仙禽は鶴をいう。胎生と考えられていたのである

う。○文選 三十九 蘇武詩四首之三「黃鶴と遠別千里願徘徊善曰瀟詩外傳曰田饒謂魯哀公曰夫黃

鶴一舉千里翰曰以人喻黃鶴言鳥飛高遠也徘徊不進號言相田未去二和刻本云臣注文選二黃

鶴は黃鶴と同義。

必鳳必の考證參照。○藝文類聚 四十四 蕭 列仙傳曰蕭史者秦穆公時人中略能致孔雀白鶴中略

一旦隨鳳飛去。○太平御覽九一三鶴一列仙傳曰王子喬(中略)乘白鶴住山巖(ハガ)。○郭璞遊仙

詩十九首之三「赤松臨上游駕鴻乘紫煙」善曰中略「橋康浴羅曰履任以相寶」方目赤松以水玉乘煙

浴白鴻頌曰茲亦赤松之締綰紫煙。○濟曰赤松古仙人鴻鳥也。○和刻本六臣注文選三十九。○江淹

雜體詩三十首班婕妤詠扇「畫作秦王女乘鸞向溟霧」善曰列仙傳曰蕭史者秦穆公時人善吹

簫蕭史有女弄玉好之公遂以妻焉一日皆隨鳳皇飛去。○和刻本六臣注文選三十九。○擬班婕妤詠

女弄玉(中略)後隨鳳乘仙言畫此於扇上以表之鸞亦鳳。○和刻本六臣注文選三十九。○藝四擬班婕妤詠

(補)

釋義 〇黃鶴遠く聯翩なり。句意は黃鶴の羣が遠くつらなりはばなく。藝文類聚九には鶴、白鶴、黃鶴、玄鶴

を列記している。しかも玄鶴の部に詩、賦、贊、文、書、序をまゝこめてある。鶴、白鳥、黑鳥、このとり等と「る」の仲間

と考えていざ知られる。鶴(白鳥)と鶴を同義として扱っているのもそのためであり(三章注に参照)。

〇鸞鳥に從ひて紫煙に下る。句意は黃鶴の羣は鸞鳥に從つて紫煙に下るものの中に入りて行く。黃鶴も鸞鳥も仙人の乗

物である。黃鶴や鸞鳥に乗った仙人の姿が當然な心頭にある。

〇聯翩一万里。一本文選疏曰「燕雀附於鴻鶴則聯翩万里也」。

〇來去幾千。神仙傳曰「趙飛城門有華表柱忽有鶴來集上少年欲射之鶴即飛去徘徊空中語曰有

鳥、有鳥、下今咸去家千年今飯來城郭如故人民非何不學于仙塚界」。

考證 〇文選 晉阮籍詠懷詩十七首之十四「雲與鶴鳥雀翔不隨黃鸞飛黃鸞游四海中略」將安歸。送沈約

曰「若斯人者不念己之短翮不隨燕雀為侶而欲與黃鸞比游黃鸞下舉中略」天翔翔四海(下略)。(和刻

本六臣注文選三十九)。

〇文選 謝朓舞鶴賦「守馴養於千齡結長悲於萬里」善曰(中略)阮籍詠懷詩

曰「鴻鶴相隨飛隨飛適若飛雙翩長風須臾萬里逝」。(和刻本六臣注文選三十九)。

右の二例は又選疏と同文ではないが、阮籍の綠懷詩に依據したものと考えられる。

今流布している神仙傳は丁令威の傳は見えない。總論の考證に引用した樞冊彙函本の搜神後記に該當する記事が見える。

釋義 〇〇 翱翔す一萬里(一萬里を翱翔し) 句意は鶴は高く一萬里を飛翔する。

〇〇 去來す幾千年(幾千年を去來す)。句意は丁令威は鶴に乗って去り千年後に歸郷する。

〇〇 已憩青田側 鶴出青田縉雲郡有青田縣一本永嘉郡記曰休溪野青田縣有雙白鶴人云神仙之所

養也

〇〇 來遊紫雲前 衡隸人好鶴以大夫祿也一本鮑明遠舞鶴賦曰啖清響於丹墀(鳴舞也)

考證 〇〇 唐杜佑通典(一三)州郡十三縉雲郡 東至臨海郡四百里(中略)東南到永嘉郡三百里(西南至)中

略)と處州今理蒼縣春秋戰國時並屬越秦漢屬會稽郡亦甌越之地晉分置永嘉郡宋齊因之隋置陳

改為處州後陽帝初復置永嘉郡大唐改為處州或為縉雲郡因山為名領縣五蒼松陽縉雲有嶺

峯山遂昌青田(領縣以下一部略法)標點本領員中事書局參觀清澤書四地理志三處州 地理志

〇〇 慶大本注の鶴出青田は杜佑の通典や一本引く永嘉郡記に依據したものであろう。〇永嘉郡記「有涿沐

溪野青田九果中有雙白鶴年年生子長大便去只恒餘父母一雙在耳精白可愛云神仙所養

(續九)白鶴 初三十鶴 養青田 六船 千九鶴 青田 御覽九二二鶴也。

〇〇 春秋經傳集解閔公第四 閔公二年十一月 衛懿公好鶴鶴有乘軒者軒大夫車(中略)將戰國人受甲者

皆曰使鶴鶴實有祿位余豈能戰 〇〇 漢書四四 漢書 初三十鶴 乘軒 六船 千九鶴 乘軒 注疏 今吳人園圃

中及士大夫家皆養之 〇〇 川添光鴻(并刊)注汲冢錄 〇〇 此非使鶴實乘軒車也但謂以大夫之秩寵之

以大夫祿食之也故曰鶴實有祿位 〇〇 慶大本注 渠解に據り有祿位を大夫祿に改めたものであろう。〇 蘇昭 蘇

鶴賦「唳清聲於丹墀舞飛容於金闈」唐曰中略唳鶴聲也中略同曰中略丹墀天子階庭
注「漢選」丹墀金闈は紫禁へ宮廷に當る。

釋義 必「已」に青田の側側に棲びて、青田のほとりほとりにづいの白鶴かとい。青田は紫禁の對として用いられてゐるが、青田縣の仙鶴の故事が念頭にあつた。

必「來りて紫禁の前に遊ぶ。衛の懿公の禁庭に於て來て遊ぶ。
必「莫言空敬言露」鼠俗通曰千本鶴見露墜于草葉上則鳴舞焉。

必「猶冀一聞」天鶴性敬言聞露滴則鳴言鶴者鳴者非止敬言露亦冀聞大也詩曰鶴鳴九臯聲聞于天也

考證 必「藝文類聚」九「鶴」「風」は記曰鳴鶴戒露此鳥性敬言至八月白露降流於草上滴滴有聲因即高鳴相敬言」
必「藝文類聚」九「鶴」「敬言露」御覽九「六」鶴」慶大本注所引「風俗通」は佚文也

必「鶴鳴于九臯聲聞于天」「九臯」天高遠也。西漢上九：九臯は更深澤。

釋義 必「言ぶ莫れ空しく露を敬むること、言わざりて水鶴がいたすに夜露を敬言或すること、
必「猶ほ莫くは」「たひ」天に聞かんこと。どうか周の世に九臯の鶴の聲が天に鳴り響いたすに再び天に聞かんものだ。

宋本初學記「三鶴」
事對に「陽鳥 仙禽」翔紫
蓋「養青田」入帳 乘軒
「適背 鳳翼」等が見る。

事對 必「詩義疏曰鶴大如鵝長三尺脚青黑高三尺餘赤
頰赤目冢長四寸多純白亦有蒼色蒼色者今又謂之赤頰常
夜半鳴其鳴高朗聞八九里惟老者乃聲」今吳人園中及士大夫家皆養之雞鳴時亦鳴繁露白鶴知夜半
鶴水鳥也夜半水位感其
生來則益鶴所以壽者無死氣於中也相鶴經曰鶴者陽鳥也
喜而鳴鶴所以壽者無死氣於中也相鶴經曰鶴者陽鳥也
而游於陰因金氣依火精以自養金數九火數七故七年小變千

(一九九〇五三)